

横山：各分科会での発表内容を各座長からご紹介いただき、最もよかったグループをスマイル賞として表彰していきたいと思います。その後、力、パワーの源についてお話ししたいと考えています。

森重：観光交流部門では、2つのグループに分かれる形で議論が展開しました。

前半の3つは、まちづくりとか地域をどのように元気にしていくかが議論の中心で、明確に示したビジョンに基づいて活動を展開していく、さまざまな人がかかわってみんなで活動を盛り上げていることが伝わってくる発表でした。後半の3つは、緑を使って地域の環境を変えていく、人々の関係を変えていく、町の様子を変えていくというのが議論の中心になりました。

全体を通して見ると、町の美観や安全、鍋、情報誌、環境、バラ、立体花壇と、コアになっているコンセプトや資源はばらばらですが、その資源を使って活動を展開していく、しかもその活動を単体の1つの活動で終わらせるのではなく、次の活動に展開していくことで広げていく、その中でいろんな人とのかかわりをふやしていくことで活動を継続していくというのが、6つの団体に共通して見られました。

人のかかわりをどのようにふやしていくか、ビジョンやミッションを共有する仲間をどうふやしていくのかが、地域の活動をしていく上で非常に重要だと考えているのですが、たくさんのヒントが入っている発表だったと思いました。

観光交流部門のスマイル賞は、「ピンチをチャンスに変えた花の街づくり」、ローズガーデンファミリー六甲アイランド CITY 自治会殿になりました。



横山：地域資源活用分科会も6組のチームから報告がありました。

1つ目の「人と自然が共生するカタクリ 100万本の里山」では、桜の植樹から始めて、26軒の皆さんが植樹のボランティア活動をされているということでした。桜から始めて、カタクリの群生地をみずからつくっていったプロセスをご説明いただいたのですが、その過程で、自分たちの町がカタクリの群生地の真ん中にあるということにも気づかれて、100万本の整備を町の人を挙げて始めた。その後、次々と活動が起こって、1年を通じて花の見られる町にしたいということで、自分たちの町には何もないと思っていたのが、実は自然というのが大きな資源だということに気づかれたという発表をいただきました。

2つ目の「京田辺市の自然を活かしたまちづくり」では、最初は、楽しい取り組みをしようということで、木津川で魚とりやカヌー、春の野草を食べるという活動を13人でしていました。そうやって木津川とかかわってきた中で、木津川の希少な植物の発見もされ、川の取り組みとともにそれを残していくという活動もされていました。年に100回も事務局会議を開くこととか、責任追及をしないということが活動の力になるという発表をいただきました。

3つ目の「全ての人が出すごみを媒体としたまちづくり、人づくりを目指す」では、資源ごみを通して社会貢献をしようということでふるさと倶楽部を立ち上げて、生ごみについていろいろ考え、ちょっとしたフォローを常に行うことによって、10件だったのが510件になり、2,000件になったという活動を報告いただきました。

4つ目の「東堅町の地域環境と伝統文化を生かした生活とまちづくり」では、来年で10年になる文化活動をされているのですが、生きていることを楽しもうということで、歴史を掘り起こしていくと町も見えてくるし歴史も見えていくということで、そういうもの美しい切り絵で表現されて、情報収集をされて年に1度整理するという活動を続けられているとのことでした。

5つ目の「めざせ1トン 学校地域をあげての生ごみ回収」では、長岡第四小学校で、環境型農業にコンポストを利用するということを考えて、そこからさまざまな取り組みをされていました。子どもたちと一緒にごみを集める活動や、地域のビール工場や人々の協力を得て活動が継続されているという発表をいただきました。

6つ目の「貝塚市の豊かな自然再発見のまちづくり」では、貝塚市の昔の写真を通じて地域を振り返りながら、近木川の活動についてお話がありました。子どもたちと一緒に川ガキになる環境活動や、遊ぶことから学んでいくという内容についてご報告いただきました。

この分科会のスマイル賞は、やましろ里山の会にお送りしたいと思います。

田端：最初の発表は、MIRAI PLUS さんの「お寺 de ハロウィン」でした。そもそも仏教ではないハロウィンをお寺と組み合わせたというおもしろみがありますが、もともと天王寺区は四天王寺を初めとして寺院が多い、なおかつ、大阪外大があるので4,000人の外国人が定住されているという文化的な素養がありました。そこで、国際交流を考えられないかということで、伝統文化を理解した上で異文化を理解する、その重要性を日本人だけでなく外国の人にも理解していただくことはできないかということで、コミュニティが持っている歴史だけでなく、現代的な観点も踏まえた活動をされていました。

2番目はNPO法人環境 21 の会で、兵庫県明石と神戸の間にある明舞団地での活動です。ここはできて50年ということで、ある意味オールドニュータウン化しているところです。ここで環境問題に取り組んでおられる活動で、長く継続されています。屋根に太陽光パネルを張るところからスタートして、現在では炭づくりもされています。兵庫県のまちの寺子屋事業とも関連づけて、子どもたちを巻き込みながら、いわゆる地球環境問題に取り組んでおられました。特徴的なのは、明舞団地という住宅地で環境問題に取り組んでおられるという点です。通常、環境問題に取り組むとなると、公害があるとか、逆に自然豊かなまちが多いですが、住宅地で取り組むことのおもしろみがあったのではないかと、コミュニティを活用した取り組みだと思います。



3 番目は五月田工区自治連合様の活動です。HUG（避難所運営ゲーム）で、実際に避難所に行ったときのさまざまな課題を机上訓練しながら、ワークショップなどで意見を集約していくという活動を行ったということでした。しかも、それを自治連合会とNPO法人、摂南大学、門真市が一体となって実現したということでした。コミュニティを舞台にした4つの連携があって実現できたというところのおもしろみ、すごさがあると感じました。

4 番目の東堅町の地域環境を生かした生活とまちづくりでは、CO₂の見える化が1つのキーになりました。シンクグローバリー・アクトローカリーと言いますが、地教環境を考えてローカルで活動することは非常に大事ですし、こういった地道な活動が最終的にはCO₂を減らすことに寄与するのですが、それがなかなか浸透しない、理解が難しいということで、その見える化に取り組まれました。CO₂排出量を計測して、インターネットでリアルタイムに見えるようにされています。コミュニティの内部のことを見える化していくというのは、CO₂に限らず、いろんなところで使えるのではないかなと思いながら聞かせていただきました。

5 番目の「書を通じて青少年の防災教育を担うまちづくり」は、神戸市は阪神淡路大震災を経験し、防災や災害の問題に非常に取り組んできました。しかし、20年もたつとそういった思いは風化してくいく、あるいは子どもたちの間でそういった思いをどう引き継いでいくのかが常に課題になっています。この団体は、そうした状況を踏まえ、書と防災をコラボレーションすることで、防災にかかわる書道を募集して、全国から7,000件集まったということです。うち700件を神戸市の原田の森美術館で展示するという活動をされています。特に東日本大震災の被災地との交流を大事にされていて、そちらの方をお呼びして書を書いていただくというイベントもしているということです。子どもたちも含めて、防災というものをどのように記憶にとどめていくのか。書というのは心を落ちつけて、ある一つのことを一心に書くわけですが、そうした行動を通じながら思いを込めていただくといったことをされている団体です。

最後にA-yan!!関西をアートで盛り上げるNPOは、コミュニケーションアートを行っているケースで、芸術家集団が、ある意味勝手に町を盛り上げているというものです。ただ、最初は自分が楽しいからやっていたんだけど、それではいけな

い、皆さんに必要とされる活動にならなければいけないということに気づいたとい
いますか、力になったということだと思います。必要とされることで皆さんのとこ
ろに出向いてさまざまな活動をしている。顔出し看板をあちこちにつくるとか、ご
当地ヒーローをつくって、いわゆる社会的マナーに反することを悪人に仕立てて盛
り上げるという啓発活動を行っています。マナーを大事にしてほしいとか、地方を
盛り上げたいということで、アートを使って活動されているということです。今特
に力を入れているのが怖いお化け屋敷ということで、ハロウィンで始まりお化けで
締めくくるとのことです。

スマイル賞は、NPO法人環境 21 の会様でございます。長く活動されているこ
とと子どもたちを巻き込んで活動されていることが評価されたんだろうと思います。

横山：ことは関西元気な地域づくり発表会の 10 年目に当たりますので、関西の元気づ
くりということで、18 団体の方々の活動のエネルギーは何が源なのか、エネルギー
というキーワードで気づいたことなどを教えていただきたいと思いますが、いかが
でしょうか。

会場：自分たちのポテンシャルを公の場で公開して皆さんに知ってもらう、これがエネ
ルギーではないか。これがある限り地域は発展するし、このポテンシャルをいかに継
続していくかがポイントかなと思います。

實光：バラの美しさが我々のパワーの源になっています。3 年目で物すごくきれいになっ
て、去年住民の方から評価していただいて、それが全国花のまちづくりコンクール
の入賞につながりました。どうしたら町を活性化できるかという思いを込めてつく
ったバラなので、普通のバラではない。立体感があるし、みんながさわれるし、に
おいもかける、町 みんなが楽しめるバラ園になっています。



川口：私は、地域が大好きなんです。私は 62 歳ですが、地域から一步も出たことがない人間で、地域を愛しているということと、女性の力を前面に出す、女性の力のすごさが地域づくりには不可欠だということを痛感しております。

田中：自分はマイノリティーというか、芸術家というのは余り世間様に知られていないので、それを知ってもらいたい。ただ、知ってもらってもそのときだけで、「はい、さようなら」という感じになるので、自分たちはなぜ受け入れてもらえないのかという謎の怒りで動いています。皆さんみたいに明るくなくて、1 人だけダークな話になってしまったので、これからどう話を転がしていこうかなと思っています。

横山：怒りがパワーになっているんですか。表現することがパワーになっているんですか。

田中：表現の前の段階が怒りです。俺たちを受け入れろみたいな。

田端：パワーの源は恐らくお金ではないんですね。アンダーマイニング効果と言いまして、内発的に頑張ろうとしているところにお金を与えてしまうと、効果が薄れてしまう。芸術家集団は本来お金をもらって何ぼというところもなきしにもあらずなんだけれども、自分の表現の場所がどこまで広がっていくかという、お金で評価されないものがあるのかなと思いました。バラの美しさもそうだと思いますが、全てがそういういったところに集約されるのかなと思います。暗い怒りとおっしゃいましたが、まさに表現を広げていく舞台が欲しいという怒りだと理解しています。

そういう意味でいくと、書を通じて防災教育をされている健康まちづくり推進協会で、コミュニティを舞台にしながら、全国へ広げていこうというのはよほど大きなパワーがないとなかなかできないのかなと思いますので、一言お願いしたいと思います。



鎮静：1週間前に展示会を終えまして、へとへとです。

我々はまちづくりという名前なので、もともと予防医学とか補完医療をテーマにセミナーやシンポジウムの活動をしていたのですが、震災以降、防災のほうでも貢献できることはないかということでやってきました。ところが、語り部の方の講演会やシンポジウムでは難しい話になってしまいうし、年々防災意識も薄れていく。そういうときに東日本大震災が起これ、防災を見直して発信できることはないかと考えて、救命士の講習会もやってきたのですが、どうしても一過性になってしまう、子どもたち、特に青少年が無理なく取り組めるものがないかと考えました。しかし、学校教育の中ではそういう場もだんだん少なくなってくる、先生が防災教育をしようとしても難しくて取り組みにくい。それでは、防災をテーマに何か書きなさいと言えば、子どもたち自身がこういう言葉を表現したい、書きたいということで表現できる機会を全国一斉につくれるのではないかとということで、こういう取り組みをしました。

今回から全国公募にしたのですが、そうすると今度はたくさんの応募を管理するのにどうしたらいいかという運営上の悩みも発生しています。今までは半分ボランティアだったので、出品料なしにやってきましたが、次回からは少し出品料をいただいて、広告、協賛も募ってやっていきたいと考えています。

横山：その力はどこから生まれるんですか。

鎮静：やっぱり怒りでしょうか。

横山：国交省の企画調整官の清水さん、今の話を聞かれてどうですか。

清水：私が何で行政に入ったかという、ただ働いてお金をもらう仕事ではなくて、自分のやった仕事そのまますの役立って、自分の暮らしもそのまますよくなると思ったからです。



外国に行ったときに、日本に生まれて損したなと思ったことがあったんです。公園に行くと、日本であれば入ってはいけない芝生の上にみんながくつろいでいて、ボランティアが子どもたちを集めて縄跳びをしている、何てすてきなところなんだろうと。それまでは、日本に生まれてよかった、平和だし経済も発展してるし、いいところに生まれたな、ラッキーと思っていたのが、日本に生まれて損したなと初めて思って、それは怒りでした。そうはいつでも、日本に帰ってくるとやっぱりちょっとほっとしたところもあったので、ここは自分のふるさとだから何とかせなあかんねんというのが今の仕事につながっていると思っています。それがやれているかどうかは甚だ疑問ですが、ぜひ皆さんからのお力添えをいただきたいと思いますが、ある意味共通しているところを感じます。

横山：うちの部会では、学校の先生もいらっしゃって、最初来られたときは、既にその学校がいろんな活動をされていたので、どうしようと悩まれたところからスタートされたということですが、今の続きでどうですか。

太田：着任した学校が、エネルギー・環境教育に平成 20 年から取り組んでいるところで、21 年に最優秀、22 年に優秀、23 年優秀、私が 24 年に着任してすぐに、何もしていないのに長岡京市の環境の都賞をもらったんです。さて、私はどうしたらいいのというところからスタートしたのは怒りでしょうか。

そんなことがあって、エネルギー・環境教育を学んできた子どもたちが、まずごみ減量についてどうしようかということで、生ごみをコンポストに入れて、飼っているヤギの糞を肥料として活用する。除草のために除草剤はよくない、草刈り機もよくない、PTA は除草作業を嫌がる、ではヤギを使おうということで、学校中の草は 1 頭の雌ヤギが全部食べてくれている。天気のいい日は外に出して、夕方になると自分で勝手に帰ってくる。そういうヤギがいて、本校の環境教育はスタートしていったのかなという気がします。

反っくり返って木の枝の葉っぱを食べていまして、ちょうど冬季オリンピックでイナバウワーがはやったので、うちのヤギはイナバウワーができますと言ったところ、「めざましテレビ」が取材に来てくれて、テレビ放送も果たしたところです。

そのように楽しんでやっていると、あちこちからいろいろ支えていただけるのかなと、これが今のパワーになっているかと思っています。

横山：イナバウワーができるという視点のおもしろさはすごい着眼点だなと思っていますが、着眼点つながりで、天王寺区の「お寺 de ハロウィン」、何でこんなことになったのかとパワーの源を知りたいと思います。

出水：「お寺 de ハロウィン」、ネーミングだけで食いついていただけるとしています。

ハロウィン自体がここ数年急に日本で巻き起こったイベントですが、もともとハロウィンは宗教がスタートではなく収穫祭ですので、それが受け入れやすいところだったと思います。「お寺 de ハロウィン」、横山先生にも食いついていただきましたけれども、テレビにも食いついていただきまして、東京のキー局2極と東京だけの放送がありました。大阪の方は反応がなくて、東京の方に受けるのかと思いましたけれども、町歩きもできるというところまで続けたという意味では、ハロウィンを選んだのは正解だったのかなと思います。

パワーの源ですが、もともと私どもは日本文化と異文化と両方体験するというのをテーマにしております。私はホームステイを受け入れたときに、その国のことをいろいろ教えてもらいましたが、では自分の子どもが外国に言ったときに日本のことが説明できるのかと思いました。着物が着れるわけでもなく、お茶ができるわけでもない。国際交流という意味で言えば、英語がしゃべれるだけではなくて、日本文化をもっと知っておくべきではないかと思いましたので、外国のことを学ぶだけではなくて、日本のことも勉強する機会を提供していきたいという思いで今やっております。

横山：その思いがパワーの源でしょうか。

出水：私たちのスタートは役所が公募した地域の評議員会で、そのメンバーが役所のほうにいろいろ提案しても、年度予算がありますので1年後、1年半後になります。そんなスピードではだめだから、自分たちでやろうと。そこにも怒りが入ってるかと思いますが、そんな形でやり始めました。

正木：唯一の宗教者です。

「お寺 de ハロウィン」って何だと思われたと思いますが、もともとお寺は、寺子屋といって、みんなが集まって何かをするコミュニティの場です。

私は3年間、ブラジルに布教活動に行っていたことがありますが、日系人の方から京都のことを聞かれても、なかなかしゃべれないという経験をしました。

私は京都の田舎出身で、今は難波のど真ん中にいるんですが、自分は日本のことを全然知らないんだなと思いながら過ごしました。

帰国後、MIRAI PLAS さんとお話が合って、「お寺 de ハロウィン」では 100 人の子どもたちが来ました。私が住職になって 10 年、お寺にそれだけの子どもたちが集まるのは初めてで、すごく活気のあるお寺になりました。お寺の敷居を下げる、開かれたお寺にしてい、地域に合ったコミュニティの場としてお寺を開放していきたいという僕の一番の目的です。

山村：「自然を大事にする仲間の輪を大きくする」、これが N P O 法人やましる里山の会のスローガンです。

お配りした資料の黄色の背景が絶滅危惧種、赤色の背景が美しいと思われる木津川に生えている植物です。これがなぜ絶滅種なのか。ちょっと前まではどこにでもあったんです。ところが、自然の環境が終わって、地球の温暖化も含めて、そこにすめなくなって、今やっと一番よいところに生き残っているんです。それが絶滅しかかっているものだから大事にしないかと言われていているわけです。

その環境を悪くしたのは誰か。人間 1 人を 1 メートルの箱と考えたと、地球の人口 80 億人は 2 キロメートル四方の箱の中に全部入ってしまう。その人間が、植物やほかの生物がすめなくなる条件をつくっている、それもつい最近からということになります。こういうことを知ってほしいなと思っています。

もう一つ大事なことは、これを知ったら、ほかの人たちに伝えてほしい、みんなと一緒によくしていきたい、一緒によくなりたい、そのことが一番大事なことはないか。手をつなぐ絆ではないかと思います。人間同士仲よくしていくことに大きな力があるのではないか。知った人、わかった人はそういうことを伝えていかないとよくなれないと思います。怒りではなくて、手をつなぐところから始まっていくのではないかと思います。

田中：先ほどネタで怒りと言いましたが、本当に怒っていることがあります。普段は地域の図工の先生として、子どもたちみんなで何かをつくって、それを使って一緒に遊ぼう、ゲームをしようということをやっています。例えば輪ゴム鉄砲をつくって、それを使って何をしようか、輪ゴム鉄砲を人に向けていいのか、危ないやろう、嫌やったらどうするのか、的をつくってそこに当てよう、的に当てたら点数が入ったらおもしろい、それで点数の取り合いをしようというように、子どもたちと一緒に

そこまで考えながらゲームをつくるという活動をやっています。

こういう活動をしていると、地域の人は、「最近の子はピコピコ（ゲーム）ばかりや。君はこういうものをもっと広めてほしい」と言うんですが、今の子どもは本当に忙しいんです。土曜日なんか僕らのお化け屋敷とサッカーの戦いです。本当に子どもが集めにくい。少子化だし、塾に行く、習いごとに行く、学校の勉強をせないかん、子どもはいつ気が抜けるのか。それなのに、体を使って遊べと大人は言うんですが、子どもはしんどいんです。

子どもらは相談に来るんです。僕はお父さんでもなく、学校の先生でもない、ただの変なおっさんやから、みんな安心して心を開いて、言うたらあかんことをぼろっと言うんです。女の子が真剣な顔をして、「うちね、きょう母さんの彼氏来んねん」とか重たい話を聞かされたりするんですが、みんなしんどいんです。子どもが「しんどい」と言うなんてどう思いますか。逆に言うと、ピコピコをやるぐらいしか気を抜けるところがないんです。

体を動かして遊ぼうと思っても、公園ではボール遊びをしたらあかん、うるさいと怒られるんです。そういうところではみんなの意見を取り入れて、中庸なところで落としどころを決めてないとあかん。子どもは大事やと言いながら、一個も大事にされていない。それで僕は怒ってしまって、子どもの好き勝手やらせてやろうということで、東成区全区を使ったスタンプラリーをやらせてもらいました。僕は子どもを信じています。みんなは、安全は大丈夫なのかと言いますが、この地域はとてもすてきで、町会の方が普段子どもたちに安全のことを教えています。だから、事故はありませんでした。学校に 3,000 枚のこれをまいて、スタンプラリーの台紙を配って、子どもたちは3日間で延べ 350 人来てくれました。事故もなく無事終わりましたが、彼らは本当に伸び伸びと、自分の校区以外もばんばん走り回って遊びました。

大人が無茶を言うてると思います。ピコピコするな、外に出ろ、道ばたで遊べば、危ないと言う、公園は狭い、どこも遊ぶところがない。みんな1回転してきて、またピコピコです。やることがないんです。だから、自分が芸術家という無茶できる立場として子どもたちにいつも言うのは、家でもできないこと、学校でもできないこと、それをおまえたちに実現させてやるというのが僕の原動力です。これが怒りです。

横山：環境教育を通じて川ガキを育ててきた橋本さんはいかがですか。

橋本：私は二十数年間、貝塚市役所で子どもたちと環境学習をしてきました。河川法の改正で、川に学ぶ小委員会ができました。川での教育は教育でない、近づく、感じる、人間形成のスタート、子どもたちにとっては原体験の場であるという位置づけです。環境教育学会の小寺先生からいただいた本に、環境教育とは環境についての教育でない、人と自然、自然と地域、人と地域のかかわりについて教育することであるとあったんです。それを実際につくれたのは、貝塚の子どもたちなんです。

原体験、人間形成の始まりが非常に大切だと思うんです。命のとうとさはそこで学ぶことができると思います。私たちは子どもたちから、遊べる古木川にしてくださいということで、古木川流域自然大学と位置づけして、海、山、川の分校をつくったんです。山の分校はほの字の里、海の分校は自然遊学館、川の分校を子どもの参画としました。これを提唱しているニューヨーク市立大学のロジャー・ハート先生が貝塚へ来てびっくりして、こういうアドバイスをいただいたんです。

今、川で遊ぶ子どもたちは少なくなっていますが、そういう文化の財産を取り上げてほしい。いろんな事件を見たときに、命のとうとさをどれだけ理解しているのかなと思います。奥本大三郎先生は、昆虫採集で殺生するのは精神を養う殺生だという位置づけをされています。

横山：子どもたちとかかわりながら、病めている日本かなというのも気になるのですが、最後の締めとして、基調講演をしていただいた高岡先生からお話をいただければと思います。



高岡：皆さん、素晴らしい情熱を持って語っておられました。それがパワーの源だと思います。私自身もパワーの源は思いです。僕が生まれたところをなくしてはいけないという思い、これが僕のエネルギーです。皆さん方も全く同じだと思います。物すごい思いを持って語っておられたので、それをずっと持ち続けてやっていくことが大事ではないかと思います。

もう一つ大事なのは、続けることと人だと思います。我が社は127人の株主さんで構成されていますが、みんな村の人です。おまえ頑張れよと言って力を貸してただけた、それがここまで続いている大きな理由だと思います。1人では絶対できませんので、たくさんの力を集めることが大事だと思います。

これからも、続けていくことと、一人でも多くの賛同者を得ることに努力していただきたいと思います。僕の賛同者を得る方法は飲みニケーションです。とにかく一緒に酒を飲んで話すことです。頑張っ続けて、仲間をふやしていただけたらと思います。

横山：締めめににびったりのお言葉でした。

ここにおいでの方々は、いろんな思いを持って、またいろんな角度のアイデアを持って集まっていますし、これからも関西の元気づくりを続けていくには人の出会いが大事だと思っていますので、こういう機会に知り合いをふやして交流を深めていただきたいと思います。そういう側面を行政が支えていただければ、よりよくなるのかなと思っています。きょうは長時間ありがとうございました。

